

母としての紫の上ⁱ

——源氏物語 明石中宮の養母——

Murasakinoue as Mother in *The Tale of Genji*

——Adoptive Mother of Empress Akashi——

足立 雍子

ADACHI Yasuko

要旨：『源氏物語』女主人公である紫の上の母性を考える。自身は実母の記憶も無くまた実子を持つことも無かった。しかしながら秋好中宮の継母として、また明石姫君の養母¹としての母親役を担い、いわば生物的母性ではなく学習する母性を獲得していく。同時に後の母として社会的な地位も付加することになる。物語の中での役どころを当時の史実と照らし合わせて考える。

キーワード：源氏物語、紫の上、明石姫君、養母

1. はじめに

紫の上には実母の記憶が無い。生涯母親不在であった。一方自身は実子を持つことが無かったが、物語のなかでは秋好中宮、明石姫君、夕霧、玉鬘などの継母格であった。従来は紫の上が実子を持たずに、明石姫君を養母として育てることを悲哀として見る考えかたもあるが、本稿²ではそこに養母と実母の共存としての読みを試みる。一方紫の上は秋好中宮、明石姫君、二代の後の母として公的な儀礼を重ねることにより、母として認知され、その地位を確立していく。紫の上晩年に降りかかる女三宮の降嫁により、自身は深く鎮静化するが、春宮妃、中宮の養母としての立場は朝廷や貴族社会からは是認され、その人格は称えられるのである。社会的な儀礼に際し母としての役目を担うことにより、紫の上はその存在を増す。母としての紫の上を、主に明石姫君

i 本稿は2018年度佛教大学国語国文学学会にての発表の一部を加筆修正したものである。

の養育をとおしてその公的な立場から改めて考えてみたい。

なお呼称については、明石姫君は「若菜上」巻より明石女御、「御法」巻より明石中宮と表記し、明石の君は「松風」巻以降は明石御方と表記する。

2. 紫の上 明石姫君の養母となる

「十六日になむ。女にてたひらかにものしたまふ」と告げきこゆ。めづらしきさまにてさへあなるを思すに、おろかならず。などで、京に迎へてかかる事をもせさせざりけむ、と口惜しう思さる。宿曜に「御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし。」

(小学館『古典文学全集』「源氏物語」濡標275頁)

(以下巻名・頁数を示す 下線筆者)

明石からの使者は明石の君に姫君が誕生したことを伝える。3月16日に無事女子誕生を聞き源氏は京にて出産させなかったことを悔やむ。既に宿曜の占いにより源氏はこの娘が将来后になることを確信していたのである。源氏は、将来の后がねである娘の乳母を選定し明石へ送る。ここから源氏の后がね計画が動き始める。元宣旨の娘を乳母として明石へ遣わす。この乳母は「故院にさぶらひし宣旨のむすめ、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、母なども亡せて」(濡標277)と、父母共に宮中で帝に仕えた由緒正しい出自であり、父は正四位下相当の上達部であった。一方明石の君の父は元従五位相当の播磨守であったから、実は仕える乳母の方が出自は高いのである。そして、次に源氏は紫の上に明石姫君の養育を委譲するのである。

源氏が明石の君との娘の養育を紫の上には依頼するにあたり、物語上ではその前提としては紫の上はこの先子供が産まれない、即ち実子を持つことが無いことが約束されている³。また、実母の明石の君は元受領の娘であるのに対して、紫の上は外腹とは言え兵部卿宮の娘であることから、母親として紫の上の身分が必要であった。将来が囑望される娘の母親の地位は大変重要である。そして、紫の上には継子虐めは起こらないという⁴その麗質が前提である。紫の上が明石姫君の養母となるための諸条件は大きく紫の上には懸かっていたのである。

源氏は明石姫君の誕生から引き取りを紫の上へ委ねるまで口惜し⁵という言葉を持って語る。まず、明石姫君出生を知った源氏が紫の上はその養育を委譲するまで源氏の言葉として使われるのである。即ち、残念、つまらない、感心しない、など源氏のことさら卑下した物言いや、紫の

上を立てた口調で明石姫君引き取りを教唆するのであった。

女君には、言にあらはしてをさをさ聞こえたまはぬを、聞きあはせたまふこともこそと思して、「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなむ。女にてあなれば、いとこそものしけれ。尋ね知らでもありぬべき事なれど、さはえ思ひ棄つまじきわざなりけり。呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」と聞こえたまへば、面うち赤みて、「あやしう、常にかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、我ながらうとましけれ。もの憎みはいつならふべきにか」と怨じたまへば

(濔標281)

実子が欲しいと思う紫の上に子が生まれず、思ひの外に明石の君にできたことがつまらないと紫の上の対面を立てる言葉である。しかし紫の上に「憎みたまふなよ」という言葉に、紫の上は顔を赤らめて「人を憎むなどとはいつ覚えるのでしょうか。」と軽く答える。その拗ねたような口調が紫の上の嫉妬する姿であり、源氏にとっては魅力的であった。

巻は進んで源氏はいよいよ明石姫君を二条院へ迎える計画を巡らす。「いかにせまし、隠ろへたるさまにて生ひ出でむが、心苦しう口惜しきを、二条院に渡して、心のゆく限りもてなさば、後のおぼえも罪免れなむかし」(松風404) 鄙で出生した娘が日陰者として育つのも気の毒でもあり、感心できない、二条院へ迎えて、養育すれば出生に関する瑕も免れるであろうと、将来の后がねとしての弱点を取り除くべく考えを巡らす。しかし明石の君の心中を思うとなかなか源氏は言い出せないのであった。源氏の口惜しは明石姫君を紫の上に委ねるにあたり、それぞれに使い分けられるのであった。

3. 紫の上 明石姫君の袴着儀礼を行う

いかがすべき。ここにてはぐくみたまひてんや。蛭の子が齢にもなりにけるを。罪なきさまなるも、思ひ棄てがたうこそ。いはけなげなる下つかたも、紛らはさむなど思ふを、めざまし、と思さずはひき結ひたまへかし」と聞こえたまふ。「思はずにのみとりなしたまふ御心の隔てを、せめて見知らずうらなくやは、とてこそ。いはけなからん御心には、いとよかなひぬべくなん。

(松風413)

源氏には明石姫君を紫の上に託し先ず袴着儀礼を二条院にて執り行う必要があった。姫君を二条院で育て、袴着儀礼を行ってほしいと依頼する。それは明石姫君が源氏の娘であることを貴族社会に認知させるための儀礼であり、姫君の養母が紫の上であることを公的に認知させるものであった。紫の上の身分と麗質即ち、継子虐めは起こらないこと、姫君養育は実母明石御方への嫉妬を軽減させるものであろうとの源氏の見論みでもあった。そのような源氏の思惑に対して紫の上は従順に答えた。「いかにうつくしきほどにとて、すこしうち笑みたまひぬ。兄をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば、得て抱きかしづかばや、」(松風413) 紫の上は子供好きであり、早くも子供を抱きたいと思うのであった。ここで源氏の思惑と紫の上の子供好きが合致した。しかし源氏は単に紫の上の子供好きに乗っただけではなかった。紫の上の将来の社会的地位をも考慮したものであった。

「うしろやすからぬ方にやなどはな疑ひたまひそ。かしこには年経ぬれどかかる人もなきが、さうざうしくおほゆるままに、前齋宮の大人びものしたまふをだにこそ、あながちに扱ひきこゆめれば、まして、かく憎みがたげなめるほどを、をろかには見放つまじき心ばへに」など、女君の御ありさまの思ふやうなることも語りたまふ。
(薄雲418)

源氏は紫の上の美質を明石御方に語る。明石御方の姫君が継子扱いされるのではないかという不安に対して、源氏は前齋宮を引き合いに説得する。紫の上自身は故六条御息所の遺児で現在は冷泉帝の女御、齋宮女御を養女格として世話していることを話す。実際女御と紫の上は1歳の年齢差しかないが、紫の上と良好な母娘関係を築いていると言う。

貴族社会において人生通過儀礼は重んじられた。特に貴人であればあるほど、その都度儀礼は繰り返される。源氏は明石にて姫君が誕生したことを聞き、「ゆめに漏らすまじく、口がためたまひて遣はず。」(澁標279) と、乳母と御佩刀などさるべき物等を贈った。そして、姫君の誕生日は3月16日であったから、生誕50日は5月5日にあたる。「5月5日にぞ、50日にはあたるらむと、人知れず数へたまひて、ゆかしうあはれに思しやる。」(澁標284) 源氏は日数を人知れず数えて、当日五十日(いか)の祝い⁶が明石に着くように使者を派遣したのである。生誕儀礼産養は3、5、7、9日と近親者主宰で行われる。通常であれば、将来の后がねの娘の祝いは源氏の許で盛大に行われ、貴族社会に喧伝するものであったろう。しかし将来、入内が考慮される明石姫君の生誕儀礼は物語には描かれていない。明石の地で祖父入道によって準備されたか。また姫君は明石一族としての血縁確認の時間とも言えるのか。しかしやはり中央貴族社会での源氏に

よる儀礼が必須なのである。鄙で出生した姫君の将来には京において紫の上の手元で養育され通過儀礼を受ける必要があった。

御袴着は、何ばかりわざと思しいそぐ事はなけれど、けしきことなり。御しつらひ、雛遊びの心地してをかしう見ゆ。参りたまへる客人ども、ただ明け暮れのけぢめしなれば、あながちに目もたたざりき。ただ、姫君の襷ひき結ひたまへる胸つきぞ、うつくしげさ添ひて見えたまひつる。

(薄雲426)

明石姫君の袴着は二条院にて執り行われたが源氏の行う事であるから、普段どおり多くの客人が参集したのであった。明石御方の母尼君の説得どおりの結果であった。姫君は既に3歳になっており、当時の貴族子女は大体3歳が袴着の年齢であり、姫君にとっては最後の機会でもあった。儀式の主宰者である着袴親は通常、父親が腰結役を負う⁷。しかし源氏はその役を「いはけなげなる下つかたも、紛らはさむなど思ふを、めざまし、と思さずはひき結ひたまへかし」(松風413)と紫の上にもその役を依頼していた。しかし紫の上が腰結役にあたったかは描かれていない。姫君が袴の紐を胸に襷のようにかけている姿が可愛らしかったと描かれ、袴着が滞りなく行われたことが述べられる。

4. 紫の上 明石姫君を愛育する

上にいとよくつき睦びきこえたまへれば、いみじううつくしきもの得たりと思しけり。他ごとなく抱き扱ひ、もてあそびきこえたまひて、乳母も、おのづから近う仕うまつり馴れにけり。

(薄雲426)

紫の上の許に引き取られた明石姫君も幼いながら、養母紫の上によく懐き紫の上を慕うのであった。紫の上もたいそう可愛いものを得たとばかりに抱き扱うのであった。京から遣わした乳母も紫の上の人柄に惹かれ、その生活にも慣れ仕えるのであった。

いかに思ひおこすらむ。我にていみじう恋しかりぬべきさまを、とうちまもりつつ、ふところに入れてうつくしげなる御乳をくくめたまひつつ、戯れぬたまへる御さま、見どころ多かり。御前なる人々は、「などか同じくは、いでや」など語りあへり。

(薄雲430)

紫の上は姫君を心底可愛いと思うと同時に子を手放す母親の心情を思いやる。「女君も、今ことに怨じきこえたまはず。うつくしき人に罪許しきこえたまへり。」(薄雲427) 無心に遊ぶ姫君を目にすると明石御方への嫉妬心も以前よりは和らぎ、大目に見るようになったのであった。

実の子ではないという悲哀よりは実母を尊重する紫の上の美質が描かれる。実母の分も可愛がるかのように乳首をくわえさせているが、子を産んでいない紫の上には乳は出ない。物語は戯れとして描くが、抱きしめるように懐に入れて、授乳するかのように乳首を子の口に当てる行為は女性の本能的、生物的母性である。紫の上は儀礼をとおして養母として社会的に認められていくが、一方で身体的な接触による、原母性をも身に付けていくのである。周りの女房など他人からは紫の上には実子ができないことの失望感が描かれる。だが、紫の上にはそのような心はない。ここでは養母と実母の共存、養母と実母はお互いに尊重し合う姿として描かれているのではないか。そして紫の上の美質が養母と養女、実母と実子の関係をなだらかなものとして作用し、周囲にも少なからず影響を及ぼす。例えば、それは源氏一家、一門のおおらかな親子関係⁸に見られる。

かくもてかしづかれたまふを聞くはうれしかりけり。何ごとをか、なかなかとぶらひきこえたまはむ。ただ、御方の人々に、乳母よりはじめて、世になき色あひを思ひいそぎてぞ、贈りきこえたまひける。

(薄雲427)

実母明石御方は手放した姫君を案じていたが、紫の上の手元で大切にされているのを聞くと嬉しく思うのであった。お見舞いを申し上げようと思案し遠慮がちではあるが、姫君付きの乳母や女房へ贈り物をするのである。紫の上も源氏も実母と実子との関係を遮断するのではなく、おおらかに受け止めている。実母から実子へのこれらの行為も、当然紫の上の承認があってこそ許されるものであったろう。

北の御殿より、わざとがましくし集めたる鬚籠ども、破子など奉れたまへり。えならぬ五葉の枝に移る鶯も思ふ心あらむかし。
年月をまつに引かれてふる人に今日鶯のはつね聞かせよ

「初音惜しみたまふべき方にもあらずかし」
引き別れ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや

(初音140)

明石御方は姫君に会うことは許されなかったが、手紙や贈り物の贈答は許されていた。それらは初音巻、明石御方と姫君との贈答歌に見られる。実母に3歳で分かれてから4年以上経過した姫君7歳の正月である。明石御方より姫君の元へ歌と髭籠、破子等が送られてきた。初春を迎えたためたき六条院の描写と共に、親子間で交わされる歌に哀切感が漂う源氏物語でも屈指の場面である。明石姫君には実母の記憶は薄れているだろう。それでも源氏に勧められ実母の明石御方に返歌をする。明石姫君は紫の上の存在と同時に離れて住む実母明石御方の存在も薄々気付くのである。明石姫君と実母の交流がなされたことも紫の上の配慮があったと推定できる。

5. 紫の上 明石姫君の裳着儀礼を行う

かくて西の御殿に、戌の刻に渡りたまふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髪上げの内侍なども、やがてこなたに参れり。上もこのついでに、中宮に御対面あり。御方々の女房、おしあはせたる、数しらず見えたり。子の刻に御裳奉る。大殿油ほのかなれど御けはひいとめてたし、と宮は見たてまつれたまふ。

(梅枝405)

「御裳着のこと思いそぐ御心おきて、世の常ならず。春宮も同じ2月に、御かうぶりのことあるべければ、やがて御参りもうちつづくべきにや。」(梅枝395)「梅枝」巻明石姫君11歳、貴族女性の通過儀礼である裳着儀礼が執り行われる。同時期に春宮の元服儀礼も行われるので、裳着後姫君の入内が行われることは、自然の成り行きと世人の思うところであった。裳着儀礼を行うことにより紫の上は后がねの明石姫君の養育を果たしたことになる。それは母として社会での認知を得ていることを意味する。当日儀礼の尊者、腰結役にはやはり源氏の養女格である秋好中宮が務めた。かつての斎宮女御(梅壺女御)である。時の中宮が腰結役を務めることは、姫君の将来と源氏一家の繁栄を支えることになる。中宮は「あえもの」あやかりものとして姫君の将来像であった。この儀式において源氏、紫の上、中宮と3人揃って姫君の後見であることを世に示したことになる。物語は盛大な裳着儀礼と健やかに成長した姫君を語る。しかしながら、実母の明石御方は参列できなかった。再会は入内時まで待たなければならなかった。

6. 紫の上 明石姫君の入内儀礼に参加

その夜は、上添ひて参りたまふに、御輦車⁹にも、立ちくだりうち歩みなど人わるかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただかく磨きたてまつりたまふ玉の瑕にて、わがかくながらふるを、かつはいみじう心苦しう思ふ。

(藤裏葉442)

明石姫君が春宮に入内する際、紫の上は母親として付き添い宮中に参入する。当初の婚姻儀礼を過ぎて、紫の上はその後の後見を実母の明石御方に譲るのであった。「かくて御参りは北の方添ひたまふべきを、常にながながしうはえ添ひさぶらひたまはじ。かかるついでに、かの御後見をや添へまし。」(藤裏葉440) 実に8年振りの親子の再会である。実母明石御方は大いに喜び、源氏自身も紫の上の配慮に感謝するのであった。源氏物語では継子虐め譚を下敷きにしながら、養母と実母は子供を挟んで互いに尊重し合う姿として描く。物語は紫の上を北の方、上と呼び、描写場面では「まかでさせたまふ」(藤裏葉442)などと最高敬語が使われるのであった。

入内の折は天皇の勅許により輦車が許された。宮中を輦車にての移動が許されるもので、姫君と紫の上は同車して参内することになった。実母の明石御方は姫君の後見として宮中参内を許されたが、自身は2人が同車する後を徒歩で参内することになる。明石御方はそれが明石姫君の瑕になると恐れ同日参内を遠慮するのであった。

上は、まことにあはれにうつくしと思ひきこえたまふにつけても、人に譲るまじう、まことにかかる事もあらましかば、と思す。大臣も、宰の君も、ただこのこと一つをなん、飽かぬことかなと思しける。¹⁰三日過ごしてぞ、上はまかでさせたまふ。

(藤裏葉442)

紫の上は明石姫君を入内させるにあたり、実の親が娘を手放す際のかすかな悲哀を感じ心中を吐露するのであった。実際今まで紫の上は明石姫君が実の子であることを望んだという描写はない。実子を欲する直接的な記述としてはこの段が、初めてでかつ唯一のものである。姫君を明石御方に委ねる考えや言動は、紫の上の姫君への深い愛情から出たものである。紫の上自身、一人の母としての純愛による発想である。娘を入内させそれを一家繁栄の絆にすべく考えるのは貴族男性の論理である。紫の上にはそのような思惑は見い出せない。

紫の上は宮中での婚礼行事に参画し、3日間過ごして退出することになる。「出でたまふ儀式の、いとことによほしく、御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思

ひくらぶるに、さすがなる身の程なり。」(藤裏葉443) その際も輦車が許された。紫の上の社会的地位は貴族社会のみならず、朝廷からも認められたことになる。ここでは紫の上は太政大臣源氏、従一位の実質的な妻であり、秋好中宮の継母である。退出する際の儀式は女御待遇であったと描かれる。

輦車の宣旨については、「無位の人がいきなり輦車を聴されるとは考えにくいので、〈女御の有様に異ならぬ〉とあることからすれば、姫君入内のときにその母として四位に叙せられていたのであろうか。紫の上は秋好の入内時に養母として叙位されていた可能性は残るが、しかし物語には触れられていない¹¹。」との論考がある。だが、物語内に描かれずとも水面下で物語と同時進行している一方の流れがあることは、この物語ではよく見受けられることであるから、その可能性はありうると考える。それでは過去において家妻としての紫の上の叙位は何時であったのか。「薄雲」巻で源氏昇進従一位牛車が許される時点か。または「乙女」巻、秋好中宮が立后時、源氏太政大臣就任時か。

その可能性を考える時「天皇の妃(キサキ)の母が必ず叙位されるタイミングは娘の立后時である」との論考がある¹²。例えばその論考を参考にすると、紫の上の叙位は夫源氏昇進従一位時に家妻の紫の上に叙位五位相当が授与され、秋好中宮立后時に継母として正三位が授与されたことも考えられるのではないか。明石姫君は入内から約1年半後「若菜上」巻では女御の君との呼称が与えられているが、姫君も入内に際し女御の位、三位相当を授与されていたと考えられるのではないか。

藤原道長の妻源倫子の例¹³にあるように、紫の上は先ず源氏の身位に即して五位を叙し、秋好が立后時に三位に叙されるのは妥当と考える。入内する姫君の母親には重要な任務があった。紫の上は婚礼行事に参内し宮中にて3日間過ごし、母親として婚礼儀礼と饗饌などに従事した。その後も「上もさるべきをりふしには参りたまふ。」(藤裏葉444)と、宮中での行事の折には春宮妃である姫君の後見強化するために参内し、母として支援することになる。そのためには三位相当の身分が宮内での活動を容易にするからである。母として宮中行事に参画することは、源氏一家を支える家妻としての紫の上の社会的な認知度をも増していくのであった。一方実母明石御方は身分柄いつでも慎みを忘れず姫君の後見に徹するのであった。その姿から後宮内では明石姫君が劣腹であることなどの風評が立つこともなく、参内の折には紫の上と明石御方は和やかな時を過ごすこともあった。2人の母親の許で明石姫君の地位も盤石なものになっていった。

7. 紫の上 明石女御の出産儀礼参与

「わが身は、げにうけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを、対の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり。身をばまたなきものに思ひてこそ、宮仕へのほどにも、かたへの人々をば思ひ消ち、こよなき心おごりをばしつれ。世人は、下に言ひ出づるやうもありつらむかし」などおぼし知りはてぬ。母君をば、もとより、かく、すこしおぼえ下れる筋とは知りながら、生まれたまひけむほどをば、さる世離れたる境にてなども知りたまはざりけり

(若菜上97)

出産を機に六条院に退出した明石女御は自身の出身を知り、紫の上の養育に感謝する。自身は鄙に生まれながら紫の上愛育のお陰で今日の自分があること思い感慨一入だった。同時に自身の宮廷内での驕りを深く反省する。劣腹の娘である女御の評判が落ちずに済んだのも実母明石御方の人柄と配慮があった。2人の母の存在が女御を支えているのであった。

しかし、春宮の女御の実母であり、春宮の第一皇子の実の祖母となった明石御方は自身の努力と人柄もあり、自然とその存在感を増していくのであった。そのような折、源氏は紫の上を称揚する。「ただまことに心の癖なくよきことは、この対をのみなむ、これをぞおいらかなる人と言うべかりける」(若菜122) 心根の穏やかな人はまず紫の上であると述べる。「そこにこそ、すこしもの的心得でものしたまふめるを、いとよし。睦びかはして、この御後見をも同じ心にてものしたまへ」(若菜123)、明石御方には分をわきまえて出過ぎず女御を後見するように諭す。明石御方は自身を卑下して、「数ならぬ身のさすがに消えぬは、世の聞き耳もいと苦くつつましく思ひたまへらるるを、罪なきさまに、もて隠されたてまつりつつのみこそ」(若菜123) と、紫の上が明石御方をかばって一人前に扱ってくださるから、身の縮むような気がする。と申し上げるのであった。明石御方は紫の上の配慮に対して常日頃より感謝している旨を源氏に伝えた。それに対して源氏の言葉は冷静である。「その御ためには何の心ざしかはあらむ。ただ、この御ありさまを、うち添ひてもえ見たてまつらむおぼつかなさに、譲りきこえらるるなめり」、(若菜124) 「紫の上は明石御方に対して好意があるというわけではない。自身がお世話できないので明石御方に単に任せているだけだ。」と言うのである。どこまでも身分差からは逃れられない明石御方であった。源氏は、現在の女御と明石御方の存在は紫の上のお陰であると、2人に訓戒をするのである。

明石女御は六条院北の殿で待望の男皇子を出産するのであった。源氏一族は勿論、明石一族に

とつても悲願の男皇子誕生である。現春宮の第一皇子であれば、将来春宮、帝となる道が開けたのである。物語ではその第一皇子の生誕儀礼の描写が続く。源氏も「このほどの事どもは、例のやうにもことそがせたまはで、世になく響こちたきほどに、」（若菜上102）と、簡略にはせず世の評判になるほど盛大に祝ったのである。物語では出産儀礼には「いかめしき御産養儀などのうちしきり」（若菜101）冷泉帝、朱雀院、中宮、親王達大臣達がごぞって参与¹⁴したと述べる。御湯殿儀では「対の上もわたりたまへり人の親めきて若宮をつと抱きゐたまへるさま、いとをかし。」（若菜上101）と、紫の上が若宮の抱き役を務め、「まことの祖母君はただまかせたてまつりて御湯殿のあつかひなどを仕うまつりたまふ¹⁵。（若菜上101）実母の明石御方はその介添え役に徹した。2人の母は協力して生誕儀礼に尽くすのであった。

巻は下って「若菜下」、物語は4年の空白を設けて進んでいく。冷泉帝は18年の在位期間の後譲位する。その後は今上帝時代となり、「六条の女御の御腹の一の宮、坊に居たまひぬ。」（若菜下157）明石女御の第一皇子が立坊するのであった。「春宮の女御は、御子たちあまた数そひたまひて、いとど御おほえ並びなし。源氏の、うちつづき後にゐたまふべきことを、」（若菜下158）明石女御はその後子供たちにも恵まれ、世人はこのまま明石女御が次期中宮として冊立されることを予測した。

一方、朱雀院の要請もあり源氏の許へ降嫁した女三宮へ、今上帝は心遣いをする。しかし「対の上の御勢にはえまさりたまはず、年月経るまに、御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて」（若菜下158）、紫の上の名声は女三宮を凌ぎ、源氏との夫婦仲も細やかであると描かれる。それには反して紫の上の出家願望はいよいよ募るのであった。だが源氏は紫の上の出家を許さなかった。紫の上にはもはや男女間の葛藤からは自由でいたいという思いが膨らむ。そのようななか、明石女御は「女御の君、ただ、こなたを、まこと御親にもてなしきこえたまひて、御方は隠れ処の御後見にて、卑下しものしたまへるしもぞ、なかなか行く先頼もしげにめでたかりける。

（若菜下159）紫の上を実母以上の存在として慕うのであった。明石御方は表面に出ることを遠慮し、自身を慎み律して行く姿は好ましいものであった。

我が身にはさらに口惜しきこと残るまじけれど、かく思しまどふめるに、むなしく
見なされたてまつらむがいと思ひ隈なかるべければ、思ひ起こして

（若菜下233）

その後源氏によって催された女楽の後紫の上は俄かに発病する。一次危篤に陥ったが、小康を

得て死を見つめるようになる。出家も叶わずこのまま死んでも「口惜しき」ことは全くあるまいと思うが、源氏の悲しむ姿にほだされ、気力を奮い立たせた形で生きようとする。

死を見つめた紫の上は「格別にお育て申したこの匂宮と女一宮とを最後までお世話ができないことが、心残りで悲しく」と思うのだった。今や紫の上を生へと引き止めるものは「この宮と姫宮とをぞ、見さしきこえたまはむこと、口惜しくあはれに思されける。」(御法489) 明石女御の子供たち、匂宮と女一宮であった。「みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとどめまほしき御命とも思されぬを」(御法479)、「今はこの世に心残りなことは無く、気掛かりな係累も無い身の上なので、どうしても生き長らえたい命とも思っていないのだが、2人の孫宮と後に残る源氏に対して心残りである。」紫の上の口惜しは明石女御の子供たちへ言葉となる。源氏は明石女御を紫の上に委譲するにあたり、姫君自身とその環境に口惜しを発した。今や紫の上にとっての口惜しは育て上げた明石女御の子供たちと源氏に注がれるのであった。

8. 紫の上 明石中宮の母となる

「御法」巻で紫の上は遂にこの世から去ることになる。その際、紫の上の公的立場はどのようなものであったろうか。「藤裏葉」巻で源氏は准太政天皇の位に就く。従って紫の上は准太政天皇の後に等しいことになる。但し准太政天皇はこの物語内での位であり、実存したものではないが、例えば准后と近似した立場であったと考えて良いだろう。そして国母明石中宮の母の立場でもあった。従ってその及ぼす力は物語内の二条院で行われる法華経千部供養に描かれる。年頃3年前から書かせていた法華経を千部供養したのである。「くはしきことどもも知らせたまはざりける」(御法481)と、源氏の助力は得ずに紫の上は自分一人の算段で行ったのである¹⁶。結果、紫の上主催の私的行事が帝、春宮、中宮たちが参与することにより、公的行事にも劣らずに最高級の待遇を得て行われるのである。御読経、捧物¹⁷は後の宮たちから贈られ、大方の御調度等は源氏が、夕霧大将は楽人、舞人の手配を、また御方々、花散里や明石御方も御誦経、捧物を供えた。「花散里と聞こへし御方、明石なども渡りたまへり。」(御法482)と、こぞって一門が協力した。この段、明石御方は明石とのみ呼ばれ身分の低いものの扱いになっている。逆に紫の上の存在の大きさが浮き立ち公的に広く認知されている様が描かれる。

起きゐたまへるをいとうれしと思したるも、いとはかなきほどの御慰めなり。
「方々におはしましては、あなたに渡らせたまはむもかたじけなし。参らむこと、
はた、わりなくなりにてはべれば」とて、しばしはこなたにおはすれば」とて、明
石御方も渡りたまひて、心深げに静まりたる御物語ども聞こえかしたまふ。
(御法487)

3月10日の法華八講行道の法会が過ぎる頃、紫の上の病状は悪化する。夏になる頃（陰暦4月）明石中宮は二条院へ紫の上を見舞うために行啓を行う。「かくのみおはすれば、中宮この院にまかでさせたまふ。東の対におはしますべければ、こなたに、はた、待ちきこえたまふ。」(御法486) 紫の上は中宮の滞在所東の対で中宮の来るのを待つ。源氏は紫の上が起きて中宮を出迎える姿を見て嬉しく思うが、誠にはかない気持ちであった。明石御方もこちらに来て3人お互いに心を込めて静かに話を交わすのであった。

常よりもいと頼もしげなく見えたまへば、「いかに思さるるか」とて、宮は、御手をとらへたてまつりて泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露の心地して、限りに見えたまへば
(御法492)

明石中宮は紫の上逝去の8月14日まで約4か月間滞在し、紫の上を看取るのであった。「消えゆく露の心地して、限りに見えたまへば」、明石中宮は「いかに思さるるか」と言って紫の上の手を取る。紫の上の臨終の場面である。最後に手を取り声を掛けたのは源氏ではなく明石中宮であった。やはり血は繋がらなくても紫の上と明石中宮は親子である。紫の上と明石中宮が養母養女より以上の親子になっていたこと、中宮の紫の上への敬愛の深さを示すものである。中宮が行啓し臨終に立ち会い、喪に服すことは紫の上が社会的にも重い存在であったことを示す。それは中宮を育てた紫の上を称揚するものだと言える¹⁸。と同時に紫の上の死を荘厳化するものであった。

9. おわりに

紫の上は養母として明石姫君を愛育することにより、実母明石御方との共存を果たし、姫君を当代の後とする大役を果たした。その際実子ではない子供を育てる悲しみや物思いは大きくは語

られない。養女を生育するにあたり紫の上の美質は不可欠である。即ち昔物語の継子虐め譚を下敷きにはしながらその轍は踏まない。養女を慈しみ育て後に育て上げたことは専ら紫の上の美質に負うところが大きい。

明石姫君を社会的に通用する女性に育てた紫の上は、様々な公的儀礼や儀式を母親として行うことで自身の社会的名声を得たのである。宮廷のみならず社会全般からの信頼を得た主人公であった。

本稿では実子を持たない紫の上がその麗質でもって、血の繋がりを越えた母子関係を築いたこと、また物語では詳細に語られないが紫の上が参画した儀式や儀礼の一端を照射することで、紫の上の母として確立した社会的地位を読むことができるのではないかと考える。

注

1. 一般的には血縁のない母親の意味、即ち社会的な養子関係で継母、義母、養母を使うがここでは、養子関係の継母であると同時に養母は養い育てる母親の意を含む。

『類語例解辞典』小学館, 2003.

2. 「(紫の上は) 光源氏の愛情が変わらぬことを認識しながら、一方で女三宮そして明石君の地位の向上を予想しているのである。そこに、養母であっても実母でない紫上の孤立した心情を読み取ることができそうである。紫の上は明石中宮の母として、社会的地位を確立する。しかし、それは養母であって実母でないという孤立した内面を抱えさせていたというべきであろう。」
熊谷義隆 『「正妻・紫上への道－光源氏の意図したもの－」 源氏物語の展望 第六輯』三弥井書店, 2009.

3. 物語内で源氏の子を産む可能性のある女性は以下のとおり。

女君 葵上 夕顔 空蝉 軒端萩 六条御息所 末摘花 △源典侍 花散里

明石の君 朧月夜 藤壺 五節舞姫

召人 中将の君 中務 中納言の君

その他 帯木 「心あてにそれかあれか、二町」

若紫 いと忍びて通ひたまふ所

花散里 中川辺りの女

紅葉賀 ここかしこあまたかかづらひたまふぞ

松風 二条東院 かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまふ人々

初音 六条院 ただかばかりの御心にてなむ、多くの人々年を経にける

4. 継子虐め譚は継母と継子（継娘である場合が多い）の対立を軸にして展開する話型。日本の昔話

では『米福栗福』、『鉢かづき』など多数見られる。継母から虐められた継子が、苦難の末に幸福になるという結末が多い。『落窪物語』、『住吉物語』などがある。

『日本歴史大事典』小学館、2007.

5. 「口惜し」は期待していたことがかなわなくて残念だの意、「くやし」が自分自身の過失を悔やむ意であるのに対し、「くちをし」は外的な事情で希望や期待に反する結果になっての失望感を表した。

期待はずれの落胆・不満・嫌悪などの感じを表す。

- ①残念だ。情けない。
- ②つまらない。物足りない。感心しない。
- ③卑しい。

『全訳古語辞典第3版』旺文社、2003.

6. 例えば、三条天皇と藤原道長次女姁子との皇女禎子内親王の五十日の儀を

藤原道長『御堂関白記』長和二年八月廿七日条に見ると

廿七日、丙戌、御五十日、従早朝時、雨下、上達部・殿上人座儲東對、戌時供餅、御臺六本、用銀器、一本有盖粥器、盛餅器、一本箸臺、置箸・ヒ・摩粉木等、別器四本、盤六枚、木菓子十二種、餅十二種十二種、大藏卿取打敷、殿上可然四位六人供奉、余供餅、而後着座、数巡後有召、着簾下座、一兩献後、令召伶人於砌下、一兩曲間、依雨下、召南階下、数曲、次上達部、殿上人給祿、大掛各一重、内大臣加織物掛、東對唐廂前内府座引出物馬一疋、隨身信命給祿、又付引出物頼信給祿、隨身等給疋絹、右大将隨身同之、折櫃五十合、未着御前座間、居簾前四方、事了欲奉大内處、雨下、仍明日可奉、殿上人并召人等給疋見、

東京大学史料編纂所データベース

<https://cliomg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/image/idata/850/8500/06/0102/0241.tif>

7. 例えば、禎子内親王着袴の儀を藤原実資『小右記』長和四年四月七日条に見ると

七日、丙辰、右中辯定頼來、示可催禊祭雜事之状、今日中宮女親王三歳、着袴、問時刻於近習卿相、報云、西戌刻者、仍黄昏參入、陣頭無人、取案内、諸卿候中宮者、即參入、后宮御座所是主上御北對東殿也、左大臣云、従内調備小親王前物、供其膳後心閑着座如何、後は云、善、此間至尊渡御、左大臣進候簾中、戌刻主上令結袴腰、其後進親王前物、沈香臺六本、二本菓子、有螺鈿風流云々、不能覚而已、中納言行成執打敷、宰相執御臺、四本、菓子御臺并御膳物等殿上人取之、皇太后宮使高侍従兼綱被奉畏物、給兼綱祿、執拝也、式部卿親王・右大臣參入・左大臣催李部王下着饗座、酒酣夜深有朗詠、垂母屋御簾、卷庇御簾、聖上出御、御座西邊机、定親王唐櫃匣具等、南簾子敷圓座等、次召王卿、次第着御座前、次居衝重、有酒事、

東京大学史料編纂所データベース

<https://cliomg.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/image/idata/850/8500/06/1004/0004.tif>

調度類は子供用に小さく作られた。そこに招待客が参入、着座する。親王の着袴には上達部、殿上人が招待され、更に親族のなかで年長者でしかるべき人物が袴の腰を結ぶ「着袴親」となり、参入する。あらかじめ占っておいた吉時に着袴の儀式があり、着袴親が進み出て袴を着せ、腰を結ぶ。当日着用の袴などの装束は親族の尊者が贈るが、親王着袴の場合は父帝が贈るのが通例であり、着袴親にも父帝がなった。儀式が終わると祝宴、管弦の遊びがあり、祝いの歌が詠まれ、参列者に祿が給された。

8. 源氏一家・一門のなだらかな親子関係と後見役等の例

夕霧	実母 葵上	後見 大宮・花散里
雲居雁	按察使大納言北の方	後見 大宮
玉鬘	実母 夕顔	後見 花散里
六の君	実母 藤典侍	養母 落葉宮
薫	実母 女三宮	後見 冷泉院・秋好中宮
女一宮・匂宮	実母 明石中宮	養育 紫の上
夕霧・典侍腹の子	実母 藤典侍	養育 花散里

9. 春宮、老親王、摂政、関白、高齢の大臣、僧正や皇后、中宮、女御、大臣妻などが勅許により、輦車に乗って宮城内を移動することが許された。

宣旨を許された親王、ほか男性は、宮城門（待賢門など）から中重門（春華門など）まで日常的に輦車に乗ることを許された。皇后など女性の場合は出入りのたびに勅許を得て、居所までの輦車が許された。

『源氏物語鑑賞と基礎知識』「梅枝・藤裏葉」至文堂, 2003.

因みに源氏は「牛車の宣旨を賜って」おり、内裏の建礼門まで牛車に乗ったまま出入りすることが許された。その資格は親王、摂政・関白、宿老の大臣、同待遇の大僧正などである。普通の官人は大内裏の宮城門で下車した。上東門を通過して建礼門まで牛車で進むとそれ以後は輦車に乗って進んだ。女性の場合は北側の朔平門から玄輝門を通過して殿舎まで進んだ。

『源氏物語鑑賞と基礎知識』「薄雲・朝顔」至文堂, 2004.

10. 「実子の場合、将来后となれば自分自身も栄華を極めることが出来る、といった世俗的発想ではない。しかし紫の上に実子がいないことを源氏や夕霧が嘆くのは、紫の上のすばらしさを認識したうえでそこに御子が生じれば身分、才覚、容貌など申し分ないはずだと考えているのである。また更に源氏一族の繁栄を考えているのである。紫の上の欠陥は真正面から語られることはない。紫の上の美しい心をとおして悲しさが看取され、非情な男性社会の力学が浸食してくる構造になっているのである。」

藤本勝義「不正女 紫上－源氏物語の深層－」『源氏物語の想像力 史実と虚構』笠間書院, 1995.

11. 「紫の上には冷泉帝の特別な配慮があったとしても、無位の人がいきなり輦車を聴されるとは考えにくいので、〈女御の有様に異ならぬ〉とあることからすれば、姫君入内のときにその母として四位に叙せられたのであろうか。」と増田繁夫氏は論じる。一方宮川葉子氏は（「紫上私論」『中古文学』50号、1992年において）「紫の上は輦車を聴されたとするが、無位から三位への叙位は考えられない。もっとも紫の上は秋好の入内時に養母として叙位された可能性は残る。だがその場合には物語に一言ふれられるのではないだろうか。」との論を引く。

増田繁夫「紫の上の妻としての地位－十世紀末の貴族社会・夫婦関係－」『源氏物語の展望 第一輯』三弥井書店, 2007.

12. 「立后後初入内時に新后穂子の親族や乳母などが叙位された。穂子の母は既に亡くなっていたが『権記』長保二年（1000）四月七日条に〈皇后初入内日有賞例文〉として載っている。穂子以降の六名の皇后、太后のうち、立后時に后母が生きている3例（円融后皇子、同遵子、一条皇后定

子)すべてにおいて〈后母也〉の説明と共に正三位が与えられている。三位という高位を家妻である后母が一律に手にできるようになったのである。娘である後の地位の荘厳化という面はあるが、必要とあれば内裏に格式をもって出入りし、天皇御前に出ることが可能な地位の象徴が三位であり、それが后母に与えられるというのではないか。三位を与えることで王権側は内裏参入を含むある種の役割を后母に期待したと考えられる。」

東海林亜矢子「摂関家の后母－源倫子を中心に－」服藤早苗編『平安朝の女性と政治文化』明石書店、2017。

13. 源倫子の例 叙位を与えることで内裏への参入と活動を容易くする。

源倫子は長徳四年(998)正月恒例の女叙位で従五位上・夫の道長は正二位内覧左大臣。しかし同年10月、一気に従三位となる。この異例の位階は4か月後の長保元年(999)2月、娘彰子が従三位に叙せられたことと、同年11月の入内に対しての叙位であった。帝妃としての娘の宮中での公式行事の支援、饗宴などの采配をすることを想定して事前に叙位をした可能性がある。倫子はたびたび参内し饗宴の取り仕切り、また四女嬉子入内時に付き添い婚礼儀礼に参与している。倫子初参内は長女彰子に入内時、長保元年(999)入内儀礼(例えば三夜目の衾覆いの儀)に伴い、3日間は多くの公卿や殿上人に饗饌を設けた。妃の母が叙位を受けることにより内裏参入が容易くなるのと同時に身内の権力を誇示した。

東海林亜矢子「摂関家の后母－源倫子を中心に－」服藤早苗編『平安朝の女性と政治文化』明石書店、2017。

14. 産養の儀礼 一条帝 敦成親王の場合を『紫式部日記』に見る。

誕生 寛弘5年(1008)9月11日

二日	十二日	お湯殿の読書
三夜	十三日	中宮庁官、御産養に奉仕す。太夫御前の物 沈懸大盤六脚、筥、馬頭並自余の器 皆銀
五日	十五日	道長
	十六日	月下の舟遊
七夜	十七日	おほやけの御産養
九日	十九日	春宮の権太夫(頼通)

15. 「明石の君が姫君の出産時に立ちあうことができたのは紫の上の麗質のお陰であり、そうした紫の上の在り方を実子のいない悲哀と把握していく傾向にあるが、それは当を得ていない。」

倉田実「明石姫君の袴着－養女となる次第－」『国文学 解釈と鑑賞 別冊』至文堂、2004。

16. 法華千部供養・法華八講

「二中曆」では法華経一部八卷二十八品を1日で書写するには、書き手30人、催2人、調卷師3人を要し、費用は書き手に浄衣三十両、書き手布三十段、催2人に各疋絹、調卷師には布三段と浄衣が与えられ、更に、墨三十廷、筆三十管、饗三十五前(料米三解五斗)・酒肴一度(料米三斗)外題書料一段を必要とした。この数字を信用すれば、法華経書写は1部につき1日のできたとして千部なので3年は要した。人件費と材料費だけで想像を絶する費用がかかった。また八講自体の費用も莫大である。

「七僧の法服など品々賜はす。」本尊とする仏像ないし曼荼羅図絵を安置し主催者以外の分担と

しても参会者への「非時饗膳」を用意した。

倉田実『源氏物語鑑賞と基礎知識』「御法 幻」至文堂, 2001.

17. 源氏物語の女性で儀礼主宰者の例

藤壺 法華八講

秋好中宮 法華八講 季御読経 源氏四十賀 明石姫君の裳着腰結役

女三宮 持仏開眼供養(朱雀院五十賀)

玉鬘 源氏四十賀

紫の上 薬師仏供養(源氏四十賀) 法華経千部供養 明石姫君の袴着、裳着
(式部卿五十賀) 明石姫君の入内

明石姫君(中宮) 法華八講

明石の君 特別な公事を主催することはない。父親の入道の追善供養もない。

18. 紫の上臨終の場面の読みとして、「紫上は本当に明石中宮の母になっていた。紫の上は世俗的価値とは別次元にいたのである。」

熊谷義隆「正妻・紫上への道－光源氏の意図したもの－」『源氏物語の展望 第六輯』三弥井書, 2009.

参考文献

熊谷義隆「正妻・紫上への道－光源氏の意図したもの－」『源氏物語の展望 第六輯』三弥井書店, 2009.

小山利彦編集『源氏物語鑑賞と基礎知識』「梅枝・藤裏葉」至文堂, 2003.

川添房江編集『源氏物語鑑賞と基礎知識』「薄雲・朝顔」至文堂, 2004.

藤本勝義「不正女 紫上－源氏物語の深層－」『源氏物語の想像力 史実と虚構』笠間書院, 1995.

増田繁夫「紫の上の妻としての地位－十世紀末の貴族社会・夫婦関係－」『源氏物語の展望 第一輯』三弥井書店, 2007.

東海林亜矢子「撰関家の后母－源倫子を中心に－」服藤早苗編『平安朝の女性と政治文化』明石書店, 2017.

中野幸一校注『紫式部日記』小学館.

倉田実「明石姫君の袴着－養女となる次第－」『国文学 解釈と鑑賞 別冊』至文堂, 2004.

熊谷義隆「正妻・紫上への道－光源氏の意図したもの－」『源氏物語の展望 第六輯』三弥井書店, 2009.